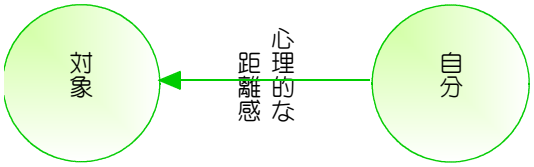
図画工作教育講座１０　《　生活画　》



同じヒマワリでも、自分が育てたヒマワリには親近感を覚える。この感情が、表現の出発点である。
絵に表したいことと作者（子ども）との心理的な距離を縮めることが、豊かな表現に繋がる。

シャボン玉飛んだ
屋根まで飛んだ
屋根まで飛んで
こわれて消えた

シャボン玉消えた
飛ばずに消えた
産まれてすぐに
こわれて消えた

風、風、吹くな
シャボン玉飛ばそ

※音楽の先生から聞いた「しゃぼんだま」の話
　シャボン玉遊びの楽しさいっぱいにひたすら元気よく歌っていた子どもたちに、「作者の野口雨情は、一人目の子どもを生まれて８日目で亡くし、そして次の子も３才で亡くしてしまったんだって。そしてこの歌を作ったんだよ」と話すと、子どもたちの歌い方が見違えるように情感豊かに。
　音楽でも図工でも同じ。思いを込めれば表現は豊かになる。

心理的な距離を縮めるために

学校生活を題材とした場合

　学級全員が経験する共通題材は、取り組むタイミングに留意する
　キーワードは「夢と希望」

　３年生のリコーダー　指使いの練習でソの音が出る頃なら、まだ全員に「夢と希望」がある。このときに描けば楽しい絵になる。上手下手の格差が出来た頃では、上手くできない子にとって苦痛な題材となってしまう。
　理科の実験器具も使い始めのときが興味関心が高い。
　体育では全員が目標（息継ぎが１回できたなど易しいレベルで）達成したとき。

家庭生活を題材とした場合

　個別題材なので、表現を助ける資料がポイント。
　子どもの生活そのものなので、心理的距離はない。
　表現を助ける補助資料を集める。

お祭りの写真やパンフレットを活用して

カブトムシを捕ったときのことを絵にしようとしたが、思い出せない。
　図書室の図鑑を見ながら描くことで、安心と満足を。

生活画の指導手順

①予告→子どもなりに想を温める時間を設けること。どの出来事にするか、どの場面にするかなど試行錯誤が表現を豊か（味のある表現とも言う）にする。

夏休みの前に、見たことやしたことを絵に描くよと、予告しておく

見学旅行の前に、運動会や遠足の前に。　　「その日突然」では子どもが困る。

②主題メモ

子どもは、描きたいことを決めても、あれも面白かった・これも楽しかったと描きたいことが二転三転して拡散し、主題がぼやけてくる。

いつ　どこで　だれが　どうした　簡単なメモで自分の思い（主題）を確かなものにする。

い　このあいだ
ど　港で
だ　お父さんと
ど　釣りをした

しかし、これでは
まだ絵が見えない。

→

い　朝・昼・夕・夜と天候も
ど　ピンポイントに絞り込む
だ　服装も付け加え
ど　まさにその瞬間

→

い　よく晴れた朝
ど　港の堤防の一番先で
だ　赤い服のお父さんと
ど　大きな魚を釣り上げた。

これで、どんな情景か
見えてくるようになる。

メモで主題が明確になれば、

途中で主題がずれたときに指摘ができる。

行き詰まったときの指導の手がかりになる。

③画用紙の選択

ささやかな選択の場だが、この積み重ねが子どもの判断力や決断力の元となる。

＊縦長にするのか、横長がよいのか。

＊ゴッホ画用紙なら，表の白色がいいのか、裏の薄緑色が合うのか。

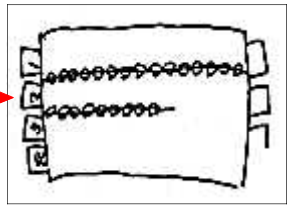
※　ハガキ大の小さい画面で描いたり、Ｂ４の普通の大きさで表現したりと、色々な大きさの画面を経験させたい。何時も同じサイズの画用紙ではマンネリになりやすい。

※　３学期最後の絵画の授業は、進学・卒業記念展と銘打って，この１年間で最も印象に残ったことを題材に、画用紙のサイズを選択させて描かせることで多様な表現の場を設定する。

④主題から描き始める習慣を付ける。

例えばプールの絵の場合

ややもすると、描きやすいプールサイドやコースロープから描こうとする。



しかし、子どもの集中力は持続しない。肝心の主題に取りかかる頃には、集中力は使い果たされていて感動のない絵になる。

プールに潜って石をとったときの見開いた目や息を止めた頬の膨らみなど一番大事な所から描き始めると主題がはっきり分かる。

⑤一斉指導→導入段階　学習目標や作業手順を。

個別指導→製作段階　机間巡視で個に対応

※製作途中での一斉指導は、子どもたちの作業や思考を中断させるからしない。

⑥作品を作り終えて完成！ではない。自分の取り組みを振り返る、見つめなおすことが成長の元となる。
そのために、題名を考える＆自己評価カードに書き込む作業を最後に設ける。
フォローすべきは、よくできなかったとか楽しくなかった　と、記入した子どもである。
なぜできなかったのか
なぜ楽しくなかったのか　考察することが授業改善。教師の授業力となる。

レポート　絵手紙を描く　主題から描くこと
文を添えることでさらに主題が明確になる

※ 子どもたちへ提示するときのポイント

① ハガキ大の画用紙３枚　② 実物を見ながら１本線で描く（クロッキー）
③ 絵の具で彩色（いろんな技法を試してみる）　④ メッセージを書く
⑤ １枚を選んで投函する

＊　この講座で重要だと思ったことは、描写力よりも描きたいという意欲であるということです。
　私は、小学校の頃、絵に自信がなくて，こまごまとした絵を描いていました。この講座で，表現したいものを大きく描いたら，こんなにも表現力のある絵になるのだと，この歳になって気付きました。しかし、自信がなければできない描法です。子どもが自信と意欲を持つためには、子ども同士が認め合い、気兼ねなく表現するような学級の雰囲気をつくることが，教師となったときの私の役目なのではないかと思いました。
　教師は，ただ技法を教え、よいものをつくらせることを目標としてはダメなのだと考えさせられました。

＊　小学校時代はほとんど、告知がないままその日に画用紙を渡されました。発想が豊かな子どもたちがペンや筆を進めていく中で、自分だけ進み具合が遅く、それがきっかけで図工嫌いになりました。
「想を温める時間を与える」という言葉を聞いたとき、なるほどと思ったと同時に自分には経験のないことだったので凄く新鮮でした。のびのびとした発想を育て、豊かな作品づくりから図工が大好きになってもらえるように，授業内容を事前に告知することは大切だと考えます。

＊　私が最も重要だと思うのは、教材を如何に魅力あるものにするかということである。
　この授業を受ける前は、教材自体の面白くなさや面白さが子どもたちの活動に影響すると考えていた。しかし、講義を聴く中で、面白い教材を使っても教師がしっかりと考えていなければ，子どもたちの中にはつまらないと感じる子どももいるのではないかと思った。
　予告とか主題メモとか参考作品の提示の仕方など授業構成の工夫が大切であると思った。

＊　私が最も重要だ、大切にしたいと思ったことは、図工の授業は子どもたちの豊かな心を育てるために、自由に表現したり鑑賞したりしていくものなのだということだ。毎回、スライドで子どもたちの絵を見せて

いただくたびに思うのは、同じテーマや教材でも，子どもたちの考え方や感じ方、表現の方法は様々であり、人数分の素敵な作品があるんだなということだった。他教科の講義でも「教師は支援する」という言葉をよく使うが、図工の授業は特に、本当に最小限の支援でいいんだと感じた。技法や作品づくりの中で、子どもたちが困ってしまったときに手を差し伸べるくらいが，子どもの表現力を伸ばすことに繋がり、さらに豊かな心に繋がるのではないかと思うからだ。

　そのためには、子どもたちの「やってみたい！」を引き出すために教材を工夫してみたり、不安を取り除く工夫をすることが，教師になったとき大切にしていきたいことだと，私は感じた。

＊　「子どもの個性を大切にする」これが最も重要だなと感じました。

　子どもは、ついつい描写力を重視し、絵に自信のない子は，どんどん図工に苦手意識を持ってしまうけれど、教師が、表現の楽しさ・工夫することの楽しさといった着想力を子どもが身に付けるサポートをすることで、図工を楽しいと思い，積極的に取り組む環境をつくり出せるからです。

　子どもが意欲を持って図工に取り組み、経験を重ねることで、様々な視点を持って物事を見るという広い視野は、図工だけではなく、その後の子どもの人生において，とても大きな財産になると思います。そのために、子どもの自由な発想を引き出し、それらの個性を大事にすることを子どもに伝えることが，教師にとって大きな役目なのだなと、この講座を通して強く感じました。

＊　「図工は技術を教える場としての役割を果たすだけでなく、子どもの思いを形に表現する場である。」

　私は、このことを聞いて，これまでの図工に対する印象が大きく変わった。それは小学生のとき、作品はコンクールに出展できてこそ価値があると思っていたからだ。しかし、この授業を受けて，そうではなく自分の思いを形にして表すことに価値があるのだと知ることができた。ここで学んだことを、将来の場で活かせたらと考えている。

＊　予告・枕詞・題材名・参考作品が重要です。なぜなら、苦手な子にとっては新しいものに取り組んだりすることに，とても不安を抱いているからです。実際、私も図工が苦手で「自由に描いていいよ」と言われても、何をしていいか分からず困惑して嫌だと思ってしまいます。

　そこで最初に述べた取り組みで不安感を減らし、自ら楽しめる子どもを育てたいと思ったからです。

＊　「子どもの心情を掘り起こすこと」の重要性です。最初の講義で、生徒の手を使って教師の思いを表現するような授業や作品ではダメだと言われたことが，非常に印象に残っています。

　この講座を受ける前までは、図工は技術や知識が重要なのではないかと思っていました。しかし講義を聴くうちに，心情を掘り起こすことの必要性を知り、実際に授業をする場面で忘れたくないと思いました。したがって、授業が技術・知識中心にならないよう注意するという意味でも、子どもの心情を重視したいと思います。